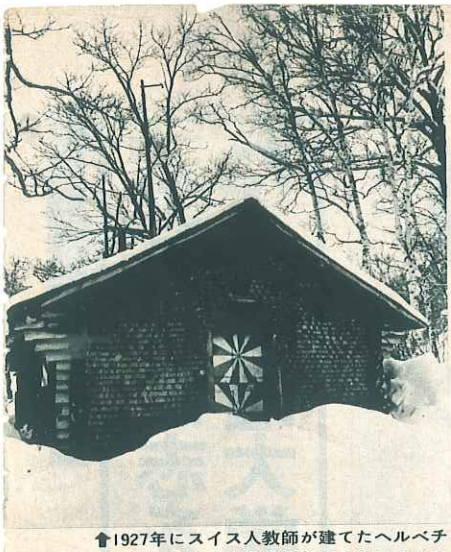
「少年よ大志を抱け」――伝統ある学舎の中に育まれてきた、北海道大学ならではのユニークな二つのグループ

撮影＝阿部幹雄

1 北大山岳部

日高や大雪の、北の雄大な山地にしっかりと足跡を印す伝統あるサークル

十勝岳周辺の冬合宿。アイゼン歩行訓練や、上級生から地形を教えてもらううちにも、脈々と伝統が生かされている



⬆1927年にスイス人教師が建てたヘルベチアヒュッテも、山岳部の伝統を感じさせる
⬇合宿での食事、直径18cmの部規格のボールに山盛の飯。盛切りの食事のすさまじさ

乱雑さの中にもそれなりの調和感が漂う部室で、主任を司会にしてフリートーキングで例会を行なう

Room——北大山岳部のこと

「私たちは頭の悪い子、元気な子」ひとところ、そんな文句が流行った時もあったという。今は、天下の最高学府で、そんなアホな人間たちの集団があって良いはずがないのかも知れないけれど、相変わらずボクらは、夏は日高の山中で、さらにアホなイワナどもを相手にいい気になったり、冬は夏天に泊まりながらスキーでバカみたいに歩き回ったりしている。

Room——と、ボクらは自分たちのことをそう呼ぶ——は現実社会から取り残されてしまったような、不思議な、そして魅力的なひとつの「社会」みたいだ。そういう集団が好きで、しつこく五年、六年、七年……と在学する人もいるようだけど、大して居心地のいいところじゃない。上級生になったからといって、誰が偉いと思ってくれるワケでもない。人間関係の中で上手くたち回って楽しもうなんて、とても考えられないことだ。

ここでちょっと、ボクたちのやっている山登りの形態をいっておこう。ひと言でいえば「個人山行」。春、冬と二回ある合宿は、日数的にはせいぜい一〇～二〇日ぐらい。場合によっては、全員一丸となって取り組む遠征とか、集中山行があるかも知れないけど、あくまで、それは全員がノッたときくらいなもので、もっぱら「個人山行」だ。しかし、この「個人山行」をやってゆくには、全体のレベルがかなりなものでないと駄目で、そう簡単にはゆかない。でも、ボクはAlleingehen以外で、個人個人への見返りが最も大きいと信じているこの山行形態が好きだ。そして、当然のことながら、このRoomという社会の中での「自由」を象徴した「個人山行」は、Room自体と鋭く対峙している。そういうとタイソーなことのようにも思えるけど、山＝集団＝個人の三角関係内の緊張感が、いつも活動を望ましい方向に進めていっている。

別に金もうけになるワケでもなし、長くいればいるだけ、まともな就職はヤバクなるし、早くいえば、何の得にもならん。そんな山登りだからこそ、ボクらは、それを核とした純粋、単純な「社会」にどっぷりと没入していってしまうのかも知れない。そんなふうなので、みんな、学生らしい、いわゆる

恵迪寮に住むチンネン君は新潟出身の2年生部員。山岳部の中堅どころだ

⬆冬合宿で三段山からＯＰ尾根の雪庇の張出した稜線を行く。上ホロカメットク山など、山岳部の舞台でもある

➡厳寒の冬山でも新人の表情は明るい。上級生が下級生をよくカバーしている。尻のつくろいにもユーモアが…

⬇タンネの樹林の中をスキーを駆って進む。こういった雰囲気の道程は北の山ならではだ

札幌駅では混雑するので、１つ手前の桑園駅から乗車するのも知恵である

「人づきあい」というものがうまくないようだし、酒の飲み方も尋常ではない。

北海道には今もまだ、熊がウヨウヨいる。未踏峰？　もあるかも知れない。活動の場として、ボクらの欲求は充分満たされている。夏は今でもストーブを持たずに、沢の中を、そう、大島亮吉のいう「自然の道」を辿って峰々をめぐる「旅」に出かけ、積雪期はスキーを下駄がわりに歩き回ったり、そりゃもう、ここじゃなきゃなかなかできないようなことをやっている。なかには、これじゃあきたらんとばかり、海外に行ってしまう人もいる。伝統的に脈々と根底を流れているパイオニア・スピリットのようなものが、そんな時生きてくれば、それはとても楽しいことだと思う。

（末武晋一・北海道大学体育会山岳部）